

～子どもを持つ親の車内の暑さ対策に関する意識・実態調査～  
**熱中症予防に必要なのは「赤外線」対策！母親の6割以上が「紫外線」と勘違い**  
夏だけでなく、熱中症が増加する梅雨の時期から正しい対策が必要

住友スリーエム株式会社(本社:東京都世田谷区、代表取締役社長:ジェシー・ジー・シン)は、熱中症リスクが高まる梅雨の時期を前に、乳幼児(0歳～小学校就学前の子ども)を持ち、週に1回以上車を運転する男女各200人を対象に、「車内の暑さ対策への意識・実態に関する調査」を実施しました。(調査実施期間:2011年5月18日～19日)

■**熱中症の原因の一つは「赤外線」、しかし6割の母親が「赤外線」と「紫外線」を正しく理解せず**

熱中症は、真夏だけでなく、梅雨の合間の急な気温上昇や梅雨明けの蒸し暑い日など、身体が暑さに慣れていない時期にも起こりやすいといわれています。また、体温調整機能が未発達な乳幼児は熱中症のリスクが高く、自分自身で体調管理もできないため、保護者の注意や予防が重要です。

今回の調査では、乳幼児(0歳～小学校就学前の子ども)を持つ母親の約80%が、車内の熱中症予防のためには、「車内の温度上昇を抑える必要がある」と認識している一方で、車内の温度上昇の原因となる「赤外線」と、日焼けなど肌に悪影響を与える「紫外線」との違いを正しく理解していない母親が60%以上にのぼることが明らかになりました。車内の温度上昇を抑制するためには「赤外線」をカットすることが有効ですが、その対処法について98%が「知らない」と答えています。

また、車内の子どもの熱中症を心配する母親は、夏には98%にのぼるものの、それ以外の季節では心配している割合が少なくなり、熱中症が増加傾向にある春でも60%に留まることが分かりました。

夏に向けて熱中症のリスクが高まるこの時期に、熱中症の原因の一つである「赤外線」に対する正しい理解の促進と、車内も含め具体的な対策の認知が必要とされています。

■**春先でも50℃近くになる密閉空間の車内では、幼児の変化に一層の配慮を**

日本生気象学会熱中症予防研究委員会の委員長として「日常生活における熱中症予防指針」を作成した稲葉裕先生(実践女子大学 生活科学部 教授)は、調査結果を受けて以下のようにコメントしています。

「今回の調査結果で、温度上昇の原因である赤外線を、紫外線と誤解している方がこれほどおられるとは驚きました。車のような密閉空間は温度が急上昇しやすく、最高気温が23℃と比較的過ごし易い4月でも、朝から駐車していた車の車内温度が午後2時頃に50℃近くまで上昇し、車内に置いた一部の缶入り炭酸飲料が破裂したという実験結果もあります(2007年4月26日『JAFユーザーテスト』)。春先や梅雨時など、夏以外の季節でも注意が必要です。また、子どもは体温調整機能が未発達で、一度体温が上がると平熱に戻りにくく、熱中症のリスクが上がります。クーラーで車内を涼しくしても、直射日光が当たることで子どもの体温はすぐに上昇します。スヤスヤ寝ていたり元気に遊んでいるように見えても、車内に子どもを残さないことはもちろん、子どもの体温の変化を注意して見ていただきたいと思います。赤い顔で汗をかいている状態では、かなり体温が上昇していると判断してください。」

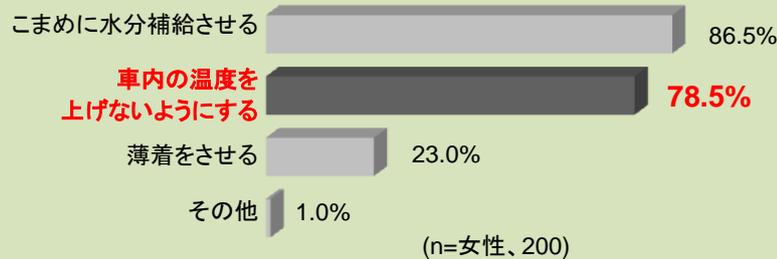
今回の調査で明らかになった結果は以下の通りです。

【調査結果】

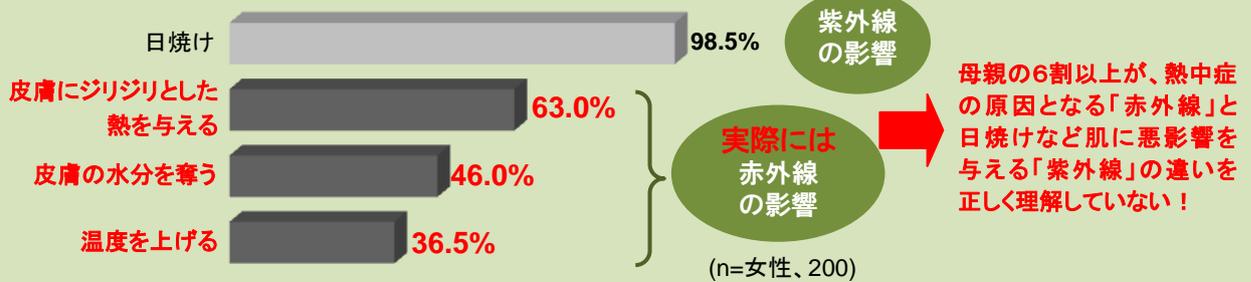
(1)車内の熱中症の原因の一つである「赤外線」について、正しい理解が進んでいない

子どもを持つ母親の約80%が、熱中症予防に「車内の温度上昇を抑える必要がある」と認識していました。一方で、車内の温度上昇の原因となる「赤外線」と、日焼けなど肌に悪影響を与える「紫外線」の違いを正しく理解していない母親が60%以上いることが分かり、また、「赤外線」対策の正しい方法については98%の母親が「知らない」と回答しています。熱中症の原因の一つである「赤外線」に対する正しい理解の促進と、具体的な対策の認知が必要とされています。

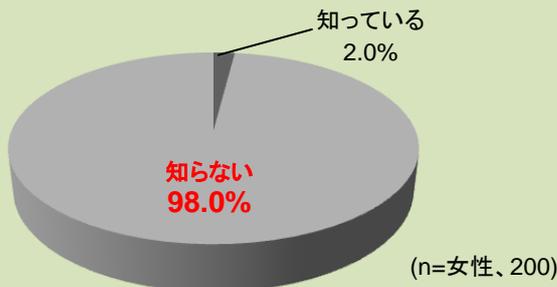
子どもの車内の熱中症を防ぐために必要だと思うこと（複数回答）



紫外線が与える影響と思うもの（複数回答）



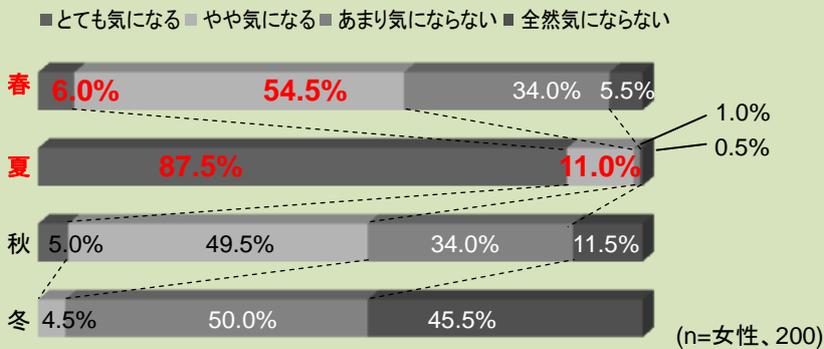
車内の暑さの原因となる赤外線を防ぐための具体的な対策を知っているか



**(2)熱中症が増加する「春」に子どもの車内の熱中症を心配する母親は60%に留まる**

夏の暑い時期は、98%の母親が子どもの熱中症を心配していました。しかし、熱中症が増加する春においては、車内の熱中症を心配している母親は60%に留まることが分かりました。

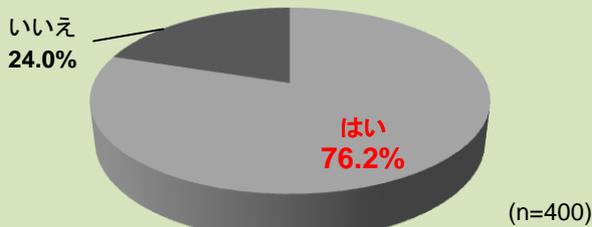
子どもの車内の熱中症について、季節ごとにどの程度気になるか



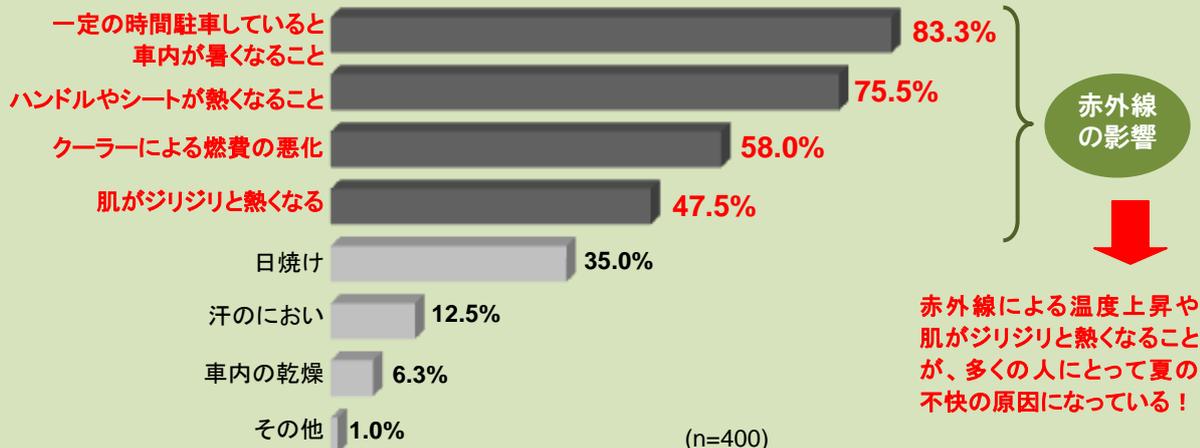
**(3)夏の運転中に不快なことの多くが赤外線の影響、最も不快なのは「駐車した車の温度上昇」**

夏の暑い時期の運転中に8割近い人がイライラした経験があります。また、夏の運転では「一定時間駐車していると車内が暑くなる」(83.3%)、「ハンドルやシートが熱くなる」(75.5%)、「クーラーによる燃費の悪化」(58.0%)、「肌がジリジリと熱くなる」(47.5%)など、赤外線による温度上昇や肌に感じる熱を、多くの人が不快に感じていることが分かりました。

夏の暑い時期、車を運転しているときに暑さでイライラしたことがあるか



夏の暑い時期に車を運転しているとき、不快に感じること (複数回答)



## 【調査概要】

「車内の暑さ対策への意識・実態に関する調査」

調査方法：インターネット調査

調査対象：車を所有し、平均して週に1回以上車を運転し、乳幼児(0歳～小学校就学前の子ども)を持つ男女

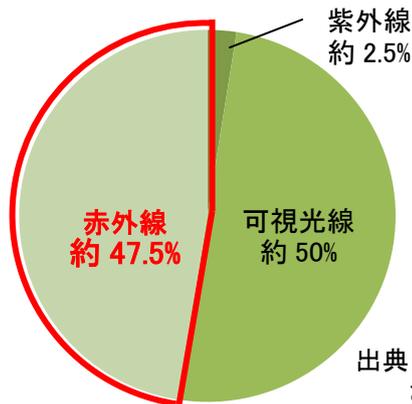
調査人数：全国の400名(男女200名ずつ)

実施期間：2011年5月18日～19日

## 【赤外線とは】

「太陽光線」は、波長の異なる「紫外線」(UV:ultraviolet)と「可視光線」と「赤外線」(IR:Infra Red)で構成されています。赤外線は、人の皮膚表面から数ミリメートルの深さまで浸透し、細胞を振動させることにより熱を発生させます。赤外線は、紫外線に比べおよそ20倍の日射強度を持ち、ジリジリと肌を熱くするだけでなく、服や車のシートなどに当たるとその部分を発熱させて輻射熱により空気も温めます。

地表面に届く太陽光の日射強度の分布



出典：JIS C 8911 で規定される基準太陽光より

## プロフィール

いなば ゆたか  
稲葉 裕 (実践女子大学 生活科学部 教授) 1973年東京大学医学部医学系研究科・保健学博士課程修了。東京大学助手、ハワイ大学がんセンター協力研究員を経て1979年順天堂大学助教授、1988年同大学教授、2008年より現職。保健学博士、医学博士。特定非営利活動法人バイオクリマ研究会理事長、日本生気象学会 熱中症予防研究委員会の世話人委員長として、「日常生活における熱中症予防指針」の作成に従事。



## 【本件に関する報道関係の方のお問合せ先】

住友スリーエム 広報サポート ブルーカレント・ジャパン株式会社 上堀(かみほり)・織間(おりま)  
TEL:03-6204-4141 FAX:03-6204-4142 Email:uka.kamihori@bluecurrentgroup.com

住友スリーエム株式会社 コーポレートコミュニケーション部 高田文人  
TEL:03-3709-8549 FAX:03-3709-8751 Email:ftakada@mmm.com